同志社大学生のボランティア活動への参加動機

19141040
妻鹿菜月
指導教員名　立木茂雄先生
20610 文字

同志社大学生のボランティア活動への参加動機

［キーワード］　ボランティア、VFI モデル、社会的規範］

19141040　妻鹿菜月

2016 年 4 月に同志社大学に本学学生のボランティア活動を支援するためのボランティア支援室が開設された．地域交流から国際協力まで、多様化するボランティアの波を受けて同志社大学にも多くのボランティアサークルが存在している。そんなボランティアに打ち込む彼らとそうでない学生が持つ要因となるものは一体何なのか。既存の VFI モデルを用いて分析を行った結果、影響を与えるものは社会的規範だった。この結果を東日本大震災以前の分析結果と比較し、震災発生当時まだ小中学生だったわたしたちの意識にどのような影響を生み出したのかを考察した結果、震災を機にボランティア活動を行うことが社会のあるべき姿であることをメディアを通してわたしたちの意識に影響を与えたからだと考察した。

目次

1章　はじめに.....エラー! ブックマークが定義されていません。
1-1　研究の背景.....1
1-2　ボランティアの浸透.....1
2章.....2
2-1　若者のボランティア活動への興味・関心の現状.....2
2-2　ボランティアの語源・定義の変容.....3
3　先行研究.....4
3-1　利他的主義と利己的主義.....4
3-2　ボランティアのイメージと関心の相関.....4
3-3　動機の多様性.....5
3-4　VFI モデル.....6
4章　目的.....7
5章　方法.....7
5-1　調査の概要.....7
5-2　手続き.....8
6章　結果.....8
6-1　単純集計.....8
(1)回答者の属性.....8
(2)ボランティアの活動歴.....10
(3)ボランティア活動頻度.....10
(4)ボランティア活動参加への障壁となるもの.....11
6-2　変数の合成・尺度化.....12
6-3　箱ひげグラフの作成.....14
6-4　ロジスティック回帰分析.....16
6-5　相関分析.....17
7章　考察.....18
8章　結論.....19
9章　おわりに.....19

1章

1-1　研究の背景

2016年4月に同志社大学に本学学生のボランティア活動を支援するためのボランティア支援室が開設された．ボランティア情報を収集・整理し，ボランティア活動を希望する学生に対して，希望する活動内容に応じた情報提供や，学生のボランティアに関するスキルアップなどを目的とした様々なセミナー・講演会などの開催も行っており，学生のボランティア参加を積極的に促進している．現在同志社大学には両校地あわせて約14ものボランティアサークルが存在しており，その活動内容はサークルごとに色濃く特徴を持ち合わせている．筆者は同志社大学のボランティアサークル「国際居住研究会」に所属しており，過去に2度にわたり東南アジア貧困地域における住居建築ボランティアプログラムに参加をしてきた．また他にも，河原町交差点での震災街頭募金やチャリティーイベントの開催など，同サークルでのボランティア活動は多岐にわたる．個人単位では積極的に献血などにも協力している．住居建築プログラムでは，東南アジアの貧困地域へ行き，現地の住民とともに実際に彼らの家を建てる手伝いをするボランティアであり，彼らとのコミュニケーションや国の歴史・文化等から貧困の現状・根本的な社会問題などをボランティアを通して学ぶ．その際，海外に二週間滞在するための費用は全てこちら持ちとなるうえ，参加費や寄付金などの費用も全て自己負担することになっている．そのことについて非常に多くの人からボランティアするのにそんなにお金を使うのかと驚き呆れられることも少なくはない．しかし筆者にとってボランティア活動とは住居建築ボランティアでも，街頭募金ボランティアでも，普段の生活ではついつい忘れてしまっている人との繋がりの大切さや暖かさを改めて感じさせてくれ，自己成長をも伴う活動だと感じている．

1-2　ボランティアの浸透

1990年，パリで開催された世界ボランティア会議でIAVE[1]の政策提言の枠組みとして世界ボランティア宣言が発行された．続いて11年後の2001年に，アムステルダムでの国際会議で国連の国際ボランティア年の始まりとしてこの宣言が改訂，再発行された．この宣言は文化，民族的出自，宗教，年齢，性別，身体，社会あるいは経済的状況を問わず，全ての男女，子供が自由にボランティア活動に関わり，参加できる権利を支持している．この宣言の中で“ボランティアは，基本的な市民社会の構成要素とされ，人類の最も崇高な願いである平和，自由，機会，安全，そして全ての人に正義の追求を実現する”と記されている．近年グローバル化が進み，世界で起こっている貧困や環境問題などがもはや遠い国での他人事とは思えなくなってきている現在，NGOやNPOの日本支部などを通じて国際ボランティアなどに興味を持つ若者も少なくはない．世界ボランティア宣言は世界のあらゆる問題をすこしでも改善し，皆が互いに支え合える世界の実現を目指す第一歩なのであった．

ボランティアと聞くとまず多くの人が思いつくのが災害が起こったときの緊急救援ボランティアだろう．避難所への物資調達や炊き出し，がれきの撤去など被災者の生活再建を支える活動として認識されている．阪神・淡路大震災の時には延べ150万人を超えるボランティアが集まり，それまでボランティアのイメージとされてきた無償性・自発性・自己

犠牲・アマチュアリズムなどから，有償化，組織化を導入しながら，いかに持続的な支援活動を可能にするかという，新たな課題を既存のボランティア論につきつけたのである．そして人々の関わりや繋がり，支え合いこそが大事であるというのが，このとき人々が強く感じた被災地でのボランティア概念である．1995年に起こった阪神・淡路大震災において，それまで主としてボランティアに携わってきた人々とは異なる多くの市民が災害ボランティアとして参加した．日本ではそれまで，ボランティアとはそれを趣味とするか，あるいは党派的意味合いを帯びている，ある意味で特別な市民が行うものというイメージが強かった．しかしそのイメージを変え，日本にボランティアを広く深く浸透させるきっかけとなったこの1995年はボランティア元年と呼ばれている．また，2011年3月に起きた東日本大震災がボランティア人口増加に拍車をかけた．東日本大震災をきっかけに新たに地域コミュニティや環境，福祉や国際協力などが不可欠な存在であるという認識が広まっていったといわれている．

内閣府の発表した平成26年度のボランティア参考資料では，約6割の人々が東日本大震災に関連して支援活動を実施しており，活動内容としては「義援金の拠出」や被災地産品購入など金銭・物的支援が多くみられた．図1に示すのは，東日本大震災が起こった際に約6割の人々が支援活動を実施した支援活動の種類である．一番多かった支援活動は「義援金の提供」であった．二番目に多かった活動内容は「被災地産品の購入」，三番目に多かった活動内容は「被災地外での募金活動」だった．これらの結果から，被災地に足を運ぶことはできない人にもできる金銭・物的支援が多いこと分かった．また，その他にも活動内容があることから様々なボランティアのかたちが多くの人の間で広がっていると言える．

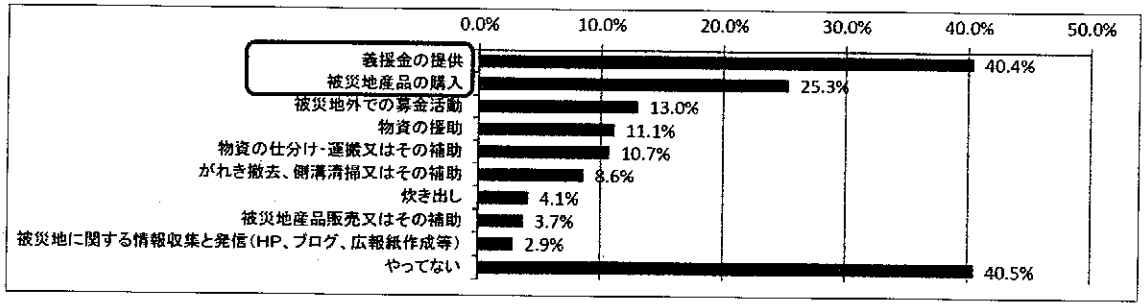

図1 内閣府，2013，「東日本大震災における共助による支援活動に関する調査報告書」より東日本大震災に関連して行った人々の支援活動の種類

2章

2-1 若者のボランティア活動への興味・関心の現状

平成25年度において，ボランティア活動に関心があると答えた国民の割合は58.3%であり，そのうちの18.9%が東日本大震災発生後，関心を持つようになったと答えている．続いて，ボランティア活動をしたことがあると答えた人の割合は35.0%，そのうち東日本大震災発生後，するようになったと答えた人の割合が3.4%であった．この結果から，ボランティア活動に関心はあるが，なかなか行動に踏み出せないという人が過半数を超えていることが分かった．参加理由を見てみると，「活動を通じて自己啓発や自らの成長につながると考えるため」と答えた人が最も多く，「困っている人を支援したいという気持ち」，「職業人や

住民としての責務を果たすため」という回答が続く．一方でボランティアへの参加を妨げている要因では，「活動に参加する時間がない」という回答が最も多く，「活動に参加する際の経費（交通費等）があり経済的負担が大きい」という回答が続いて高い割合を占めている．

平成29年1月に内閣府によって実施された社会意識に関する世論調査では，「日頃，社会の一員としてなにか社会の為に役立ちたいと思っているか」という社会への貢献意識を問う項目において，思っていると答えたのは40～60代の人々であった(65.4%)(内閣府 2017)．荒井は，総務省が2011年に行った「平成23年社会生活基本調査」を元に，20歳代の若者における１年間に「ボランティア活動を行った」人数の割合が，他の世代に比べて低く，調査対象者全体の2割に満たなかったと指摘している(荒井俊行　2016)．さらに満13歳から満29歳を対象にしたボランティア活動への興味を国ごとに調査し，比較した「日本と諸外国の若者のボランティアに対する興味」の調査結果では(内閣府　2014)，ボランティアに興味があると答えた人数が最も多かったアメリカの61.1%に対し，日本は35.1%と，韓国・アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・スウェーデンの7カ国中最も低い数字であり，地震などの災害が頻繁に起こる日本の若者が先進国の中で最もボランティアに関心がないという結果であった．また，「小・中・高等学校の授業の一環として」のボランティア活動は，大学生のボランティア活動参加経験に影響を与えるかどうかという研究がなされ，「小・中・高等学校の授業の一環として」のボランティア活動は大学生でのボランティア活動参加経験に結びつかないことが実証されている(荒川裕美子・保住芳美・吉田浩子 2006)．阪神・淡路大震災の際に活躍したボランティアの半数が学生だったことから(高木修・玉木和歌子　1996)，ボランティア活動に関する研究では大学生が主な対象となってきた(岡鼻千尋　2013)．しかし実際にボランティア活動に参加している学生は全体の1割程度であることが示されていることから(倉掛比呂美・大谷直史　2004；妹尾香織　2008；森法房　2002)震災をきっかけに広く浸透し，近年様々な展開をみせているボランティア活動であるが，若者の関心としては低いと言うのが日本の現状であると言えるだろう．

2-2　ボランティアの語源・定義の変容

“ボランティア”の語源は，ラテン語の「ボランタス(Voluntas)：自由意思」，フランス語の「ボランティ(Volunte)：喜びの精神」，英語の名詞では「ボランティア(Volunteer)：志願兵」，動詞では「自発的に申し出る」という意味を持つ(福岡県社会福祉協議会ボランティアセンターHPより)．日本では，自分の意思で自発的に行なう社会参加活動のことをさしており，「自発性を大切にする理由」は，Voloというラテン語(英語では“Will”にあたる)に人名称のerがついて，Volunteerという言葉ができたからとも言われている．またVolunteerの語源を遡ると，ラテン語のVoluntarious(切に求める)にたどり着く，という説もある(大阪ボランティア協会　1981)．

ボランティアの定義については以下の3つの大原則が一般的にあげられる(海野和之 2014)．一つめは他から強制されたり，義務としてするのではなく，個人の自由意思で行なう「自発性」を持つこと．二つめは他者や一般の利益を指し，だれもがいきいきと豊かに暮らしていけるように，支えあい学びあう「公益性(社会性ともいう)」を持つこと．三つめは経済的な報酬を求める活動ではなく，お金では得られない出会いや発見，感動や喜び

を得る「無償性」であること，である．近年では通称ボラバイトと呼ばれる金銭の報酬が与えられる有償ボランティアが存在する．全国の学生・社会人が経験したことがない仕事を経験する事や，地方の人たちとふれあう事を目的として，農家での農繁期，宿泊施設でのハイシーズンなど，地方で人手を必要としている時期にお手伝いに伺い，一緒に働き，コミュニケーションを図ることを最大の目的とする．有償ボランティアの報酬は時給にして300円から700円ほどとなっている．また住み込みで募集しているボラバイトも多く，ボラバイトの種類によっては，体力的に負担がかかるものもある．これらのことから，お金が一番の目的ではなくその活動内容に魅力を感じる参加者が多いことが特徴といえる．さらには，学校における課題あるいは単位の一つとしてボランティア活動が取り上げられることもあり，必ずしも上記のような定義に当てはまらなくなっているのが現状である(伊多波美奈・首藤敏元　2016)．このことからボランティアの定義を明確にすることは難しく，ボランティアの定義はその活動内容の広がりや時代とともに変化していることも確かである．

3　先行研究

3-1　利他的主義と利己的主義

ボランティアの参加動機として利他的主義というものがある．利他的主義とは他人に対して「何かしてあげたい」と思う考え方であり，自らの利益を顧みず，極端な場合は犠牲にしてでも，他者を援助し，その人の苦難を助けようとする心情であり，さらにその行為に至る過程を支えるメンタリティであって，等価交換の原理とは対極にある(田尾雅夫 2001)．しかし「他人のためにボランティアをしている」という考え方だけでは，ボランティアをする側もまた，疲れてしまうことがある．「かわいそうだからしてあげる」という発想では対等な関係は生まれず，心理的負担で疲れてしまう(柴田謙治・原田正樹・名賀亨 2010)．そこに自己実現の観点から「私のためのボランティア」という利己的側面を持つ動機が広がり，ボランティア活動をする人の拡大にプラスになっている．しかしボランティアが「自己成長のため」などの自己のニーズを満足させることに専念してしまうと，他者の立場からものを考えたり，自分の活動を振り返り検証してみるという客観的な視点が弱くなるという指摘も見過ごすことはできない(興梠寛　2003)．持続的にボランティア活動を行っていく為には，利他的主義と利己主義両者のバランスがうまく保たれていることが大事になってくるだろう．

3-2　ボランティアのイメージと関心の相関

ボランティアのイメージはボランティア活動の関心に影響を与えるのだろうか？この関係を明らかにしているのが，小澤の「ボランティアのイメージと関心の相関関係」という調査分析がある．小澤は，物理的な距離の近い韓国と日本の大学生を対象にボランティアへ抱くイメージとボランティア活動への関心の影響を比較した．(小澤亘　2016)その結果日本では「まじめな」「困った人を助ける」といったポジティブなボランティアのイメージは大学生のボランティアへの関心にプラスの影響を示さなかった．一方で，韓国ではこのイメージがボランティアへの関心にプラスの影響を示している．また，「自己犠牲」「偽

善的な」というネガティブなイメージが韓国の大学生のボランティアへの関心にマイナスの影響を示すことはなかった一方で，日本ではネガティブなイメージが強いマイナスの影響を与えることが示された．小澤はこのことからボランティアのイメージと関心の相関には国特有の社会構造が伏在していることが推察している(小澤　2016)．

また，ボランティアという言葉からイメージできるものは多くあるが，荒川が大学生 716 人を対象に行ったボランティアのイメージに対する調査(荒川　2008)では，ボランティアのイメージを「思いやり」と回答した学生が全体の 67%と最も多く，次いで「奉仕活動」(60%)，「自主性」53%という結果報告がでている．また，少数ではあるが，「時間と労力が必要」(39%)や，「自己犠牲が必要」(24%)，「自己満足」(18%)といったネガティブなイメージも存在することは確かであり，現在のボランティアはポジティブイメージとネガティブイメージの両側面を持ち合せているといえる．

3-3　動機の多様性

ボランティア活動への参加要因を調べると，非常に多くの先行研究に出会える．一般的に多くの先行研究の中で，ボランティア参加に関係する要因として，社会背景または人口統計的なもの，心理的なもの及び経済的なものの三つが取り上げられてきた．人口統計的な要因には，性別，年齢，職業，収入等が含まれる．心理的な要因は通常は動機と呼ばれている．経済的な要因には，賃金率及び寄付などが相当する(森・森・犬塚ほか　2010)．「ボランティア活動」の形態別・都市階級別にみたボランティア活動参加率の結果では，「団体等に加入して行っている活動」の割合が，「加入せずに行っている活動」の割合よりも高く，団体としては，「地域社会とのつながりの強い町内会などの組織に加入して行っている活動」の割合が最も高い．そして，ボランティア活動参加率を都市階級別にみると，町村が 31.3%と最も高い(大都市は 23.5%)．これは大都市よりも町村の方が地域社会との繋がりが深いということを示しており，この繋がりこそが人々をボランティア活動に参加しやすくしている要因のひとつであると述べられている．そしてこの繋がりは社会学では社会的連帯(ソーシャルキャピタル）と呼ばれる．社会的連帯が強ければ強いほど人々は集団や社会をよりよいものにしようと自発的に行動するという考え方である．社会的連帯に関わる要因として，集団加入や近隣交際の頻度，社会関係の広がりといったものが扱われている．デュルケムによると，公共的活動への自発的な参加は，社会集団に対してわれわれが感じる愛着によって支えられていると考えられ，人々がボランティア活動に参加する要因のひとつにその社会集団への愛着の強さが重要とされる(Durkheim 1925=2010：173)．

ここでひとつ，ボランティアと社会活動の参加の関係について明らかにした興味深い研究を紹介する．小林久高によると，「幽霊を信じる人ほど選挙の投票に行ったりボランティア活動をしたりする傾向がある」(小林久高　2014)という．小林は係数データを用いて「霊的意識」「政治参加」「社会参加」の間にプラスの相関関係が存在することを示した．人は個人の合理的な利益の追求を求めて政治活動や社会活動へ参加するという観点は重要であるとした上で，しかしながら政治活動や社会参加を目的合理的な利益実現行動とする視点からは説明できない減少が存在することを認めた．そして政治参加や社会活動の背後に個人利益の合理的追求には還元できない世界が存在することを示したのだ．

ほかのボランティアを促進する要因としては　年齢，社会階層，学歴，青年期の広い友人

関係などが先行研究で言われている．年齢についての先行研究をみると，若年層に比べて中高年層がボランティア活動に積極的であることがわかる(猿渡壮　2015)．社会階層についてみてみると，「学歴が高く世帯収入の多い人ほどボランティア活動に参加している」とする先行研究があった．ボランティア活動には，階層的に豊かな層ほど参加に積極的であるという高階層仮説というものが成立する可能性もある(平岡公一　1986;豊島慎一郎 1998；仁平典宏　2008).2002年に行われたSSM調査で，青年期の広い友人関係がボランティアを促進する要因となりうることがある．青年期の友人関係とボランティア活動との関係に調査では，青年期に広い友人関係をもっていた人はそうでない人よりもボランティア活動に参加していることがわかった．人々との間に築かれた連帯は，たとえそれが過去のものであっても，ボランティア活動への参加を高めているのである．興味深いことに，こうした関連はすべての年齢層で成立する．20 代の若年層から 60 歳以上の高年層までのいかなる年齢層においても，青年期に広い友人関係を築いていた人ほどボランティア活動をしているのである(猿渡　2015). Smith によれば，これまでの研究においては，文脈要因（コミュニティのサイズなど），社会的背景要因（学歴や性別など），パーソナリティ要因（外向性や積極性など），態度要因（その組織が好きかどうかなど），状況要因（その組織に入ることを頼まれたなど），社会参加要因（様々な社会的活動にどのように参加しているか)など,以上6種類がボランティア活動への参加要因となるとされている(Smith 1994).しかしどの研究においてもボランティア参加者に特定の動機を明らかにすることは困難であり,人は様々な動機を持ち合わせボランティアに参加しているといえる.つまり，これら一つ一つの動機にはそれぞれ関係するボランティア活動とそうでないボランティア活動があり，動機はボランティア活動の種類に特異的に関係するとして，ボランティアを募集及び仲介することを想定した場合に，個人の特性からその人が参加したいと思うボランティア活動を細かく絞ることができれば非常に効率的であるという研究結果がある(森ほか　2010).

3-4　VFI モデル

Clary や Snyder が提唱している VFI（Volunteer Functions Inventory）モデルは，ボランティアの動機を利他的動機や自己犠牲,信念によってボランティア活動を行う「価値」，ボランティア活動が社会勉強や人生経験としてプラスであるとし参加する態度の「理解」，他人とふれあう機会としてボランティア活動を行う心理としての「社会」，ボランティア活動に参加することで知識や技術や能力を試すチャンスになったり，キャリア開発に繋がったりすると考える「キャリア」，自分より不幸なものを助けることで罪の意識を払拭したいとか,ボランティア活動に参加することで自分の問題を忘れたいという意識の「防衛」，自尊心や自己肯定を高める為の動機とする「強化」の6種類に分類し，分析している．このモデルはボランティアの動機構造をシンプルに表しており，信頼性の高さも確認されている（Bowen et al.2000,Clary et al.1998,Clary et al.1996,Omoto and Snyder 1995 など）．このモデルを使った全米調査では，「価値」，「理解」，「社会」，「強化」の4種類の動機機能において女性の方が男性よりも強かった.また人種によっても差がみられ，「キャリア」，「理解」，「強化」，「防衛」の4機能は黒人に比べ，白人の方が強かった．また年齢ごとで比較すると，若者であるほど「キャリア」や「理解」の動機が強く，

年収が高いほど「価値」が強いということも実証されている．このVFIモデルは「異なる社会的文化を背景に持つ対象者にも当てはまる尺度」であるかを明らかにするべく，日本国内でのその妥当性ならびに有用性が検討され(坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫　2002)，我が国におけるVFIモデルの妥当性ならびに有用性が実証された．よって今回の研究ではVFIをモデルを採用し，分析を進めていく．

4章　目的

先行研究より，ボランティア活動は「利他主義」の精神が表出したものであると考える心理的要因と，何らかの見返りを期待しコストとベネフィット認識によって左右される利己的な動機によって基づく行為であるとされる研究，そして参加動機は複数の次元によって構成されているとみる立場(複数動機アプローチ)の三つの研究群があることが分かった．そこ本研究ではこれらの 3 つのモデルを参考にしつつ，ボランティア参加動機に関する様々な研究を参考に，本調査では複数動機アプローチの代表であるVFIモデルを用いて，どのような要因が同志社大学生のボランティア活動に影響を与えるのか，また，違いが生まれる要因を探ることを目的とする．今回VFIを用いて分析を行った理由は，VFIには先行研究に言われてきた「利他主義」「利己主義」というボランティアの精神をどちらも含む要素を持っているためである．そして本研究を行う意義は，坂野らのVFIモデルの有用性が示された研究は東日本大震災発生以前の2002年のものであり，東日本大震災発生から7年が経とうとしている．東日本大震災発生の前と後では若者の意識が変わっている可能性があり，日本の大学生のボランティア活動の動機に変化がみられるかを明らかにすることである．

5章　方法

5-1　調査の概要

調査対象は同志社大学に在籍する学部生で，筆者の所属するボランティアサークル(国際居住研究会)，筆者の所属するゼミの担当教員である立木茂雄先生の「家族社会学」の受講者，その他(筆者の知り合い)にそれぞれ2017年度上半期の成果発表会，講義時間を利用した集合調査法により実施した．調査期間は平成29年10月中旬から11月初旬までの約2週間であった．標本数は104であり，うち有効回収数は94(女性59，男性35，無回答3)であった．

調査内容は，基本的属性(性別，年齢，出身地，所属サークル，高校時代の部活)，ボランティア活動の有無，先述したVFIモデルを用いる．本調査では坂野・矢嶋・中嶋によって，原意を損なわないよう留意し訂正された邦訳版VFIモデルを質問項目として利用した．VFIの六つの領域「価値」「理解」「社会」「キャリア」「防衛」「強化」を「利他主義」「知識の習得」「社会的規範」「職業」「感情的安寧」「自尊心の高揚」の6つの操作的概念で測定する．

価値の項目は「自分より恵まれていない人のことが気になる」「自分が直接ボランティアで関わっている人のことがとても気になる」「困っている人をみると気の毒に思う」「ほか

の人を助けることを大切に思っている」「じぶんのためになれることならやれる」.

理解の項目は「自分が取り組んでいることをさらに深めることができる」「ものごとについての新たな考え方が得られる」「直接的な体験を通して様々なことが学べる」「自分が色々な人と付き合っていく方法が学べる」「自分の長所を見直すことができる」.

社会の項目は「友達がボランティア活動に参加している」「友達は私がボランティア活動に参加することを望んでいる」「私の知っている人々は地域での助け合いに関心が高い」「親しい人の中に地域での助け合いをとても大切にしている人がいる」「ボランティア活動は自分がよく知っている人々にとって重要な活動になっている」.

キャリアの項目は「自分がなりたい職業につくきっかけを作ってくれる」「仕事や職業に役立つと思われる新たな出会いの場となる」「また別の職業を探す機会を与えてくれる」「自分が選んだ職業で成功することに役立つ」「ボランティアの経験は履歴書に書くといい印象を与える」.

防衛の項目は「私がどんな気分の時でもボランティア活動はそれを忘れさせてくれる」「ボランティア活動をすることであまりさみしさを感じないですむ」「ボランティア活動をすることでほかの人より恵まれていることへの罪悪感が幾分和らぐ」「自分が直面している個人的な問題を解決するのに役立つ」「煩わしいことから逃避するのに良い方法だ」

強化の項目は「自分の大切さを気づかせてくれる」「自尊心を高めてくれる」「自分が必要とされていることを実感させてくれる」に配置，計30項目で構成されたものを用いた．各項目に対する回答は「あてはまる：4」「どちらかといえばあてはまる：3」「どちらかといえばあてはまらない：2」「あてはまらない：1」の4件法で求めた．ボランティア活動有無について，「はい」と選択した回答者には「今までしたことのあるボランティアの活動内容」「活動期間」「現在のボランティアへの参加状況」「感情の安寧」の項目も追加し，「いいえ」を選択した回答者には「ボランティアの障壁と感じる」16項目を作成し，そのすべてに4件法で求めるかたちをとった．「感情的安寧」の項目をボランティア参加経験のある人にだけ答えさせると対象を絞った理由は，「感情的安寧」はボランティアをしている時の心の状態を含むため，参加経験のない対象者に答えさせることは困難であると筆者が判断したためである．尺度の集計・分析には SPSS(ver. 24) と Excel を使用した．

5-2 手続き

分析は単純集計，合成変数作成，ロジスティック回帰分析の順に行った．

6章 結果

6-1 単純集計

(1)回答者の属性

学部構成は以下の通りである．社会学部51%が最も多く，続いて法学部12%，政策学部12%，GR（グローバル地域文化）学部10%，文学部7%，経済学部5%，商学部2%，理工学部1%となっている．社会学部率が高く学部構成に偏りがみられるが，社会学部の授業で質問紙を配付したためこのような比率になったといえる．回生構成は1回生24%，2回生31%，3回生25%，4回生19%，5回生1%となっている．1〜4回生の間には回生の偏

りはそれほどみられない．以下はそれぞれの図である．

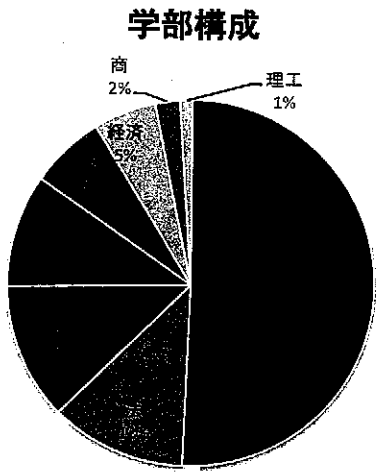

図 2

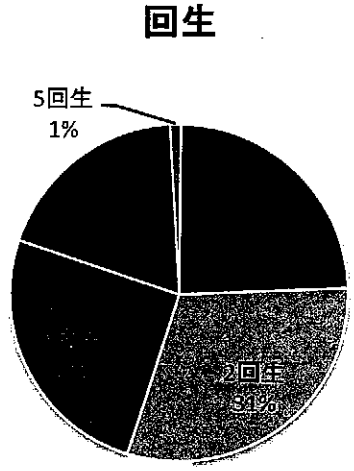

図 3

以下の図4は，ボランティアの参加の有無と男女比を示している．ボランティアの有無については，78%の人が「ある」と答え，「ない」と答えた人は22%だった．ボランティア経験が「ある」と回答した78%の男女の内訳は図5のとおりである．男性が約28%，女性が50%である．ボランティア経験が「ない」と回答した22%の男女の内訳は，男性が約10%，女性が約12%であった．

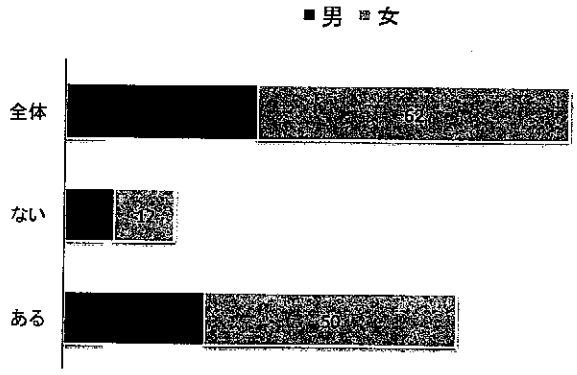

図 4

ボランティア経験があると答えた学生にその活動内容をたずねた．以下がその内訳である(図 5 参照)．「国際交流・国際協力」と答えた割合が 22%と最も多く，続いて「環境美化(清掃・ゴミ拾いなど)」が 19%，「募金・寄付金活動」が 16%，「祭りなど地域行事の手伝い」と「小・中学校，公民館などの教育活動」が 11%となっていた．調査対象者の学部をみると，日頃から授業で海外の文化等について勉強しており，国際協力などに触れる機会も多いと考えられるグローバル地域文化学部の割合が全体の約 1 割であったのにもかかわらず，「国際交流・国際協力」の活動内容が最も多かったことから，同志社大学生は学部・

学科に関わらず国際関係に興味を持っている人が多いことが推測される．また，同志社大学には「SIED」と呼ばれる学生が主体となり，国際交流イベントを企画・実施する為ために国際センター留学生課に設けられた組織が存在している．定期的に留学生を招いた交流会やイベントなどが大学構内で行われており，大学生にとって国際交流や国際協力の活動は，気軽に始められるような身近なものという認識が高くなっているのではないかと推測する．「環境美化」，「募金・寄付金活動」は活動に参加するための経済的負担も少なく，また年齢や体力の有無に関わらず気軽に行えるため授業の一環として小・中学校や高校で取り入れられることが増えてきている．そのため多くの人がボランティア活動に参加したことのある人の多くが経験していると考えられる．

ボランティア活動内容

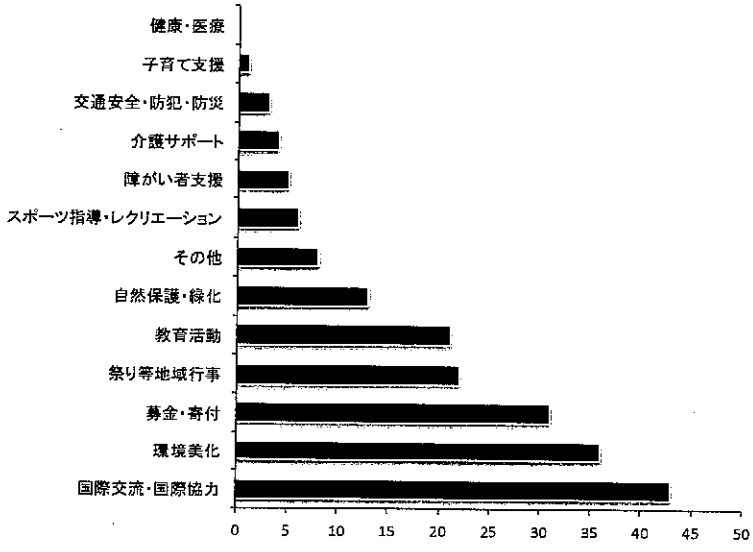

図 5

(2)ボランティアの活動歴

図 4 はボランティア経験があると答えた学生の活動歴を表している．活動歴 1 年未満と答えた学生の割合がもっとも高く(42%)，1〜3 年未満と答えた学生の割合が 32%だった．3〜5 年未満と答えた学生の割合が 22%で，5 年以上と答えた学生の割合が 4%と少なかった．

(3)ボランティア活動頻度

ボランティア経験があると答えた学生の「現在参加しているボランティア活動の頻度」をたずね，以下の結果が得られた．現在参加しているボランティアの参加頻度を「毎日近く」と答えた学生はわずか 4%であり，頻度としては「半年に一回以上」と答えた学生が 31%と最も多かった．また，「現在参加している活動はない」と答えた学生も多く(27%)，ひとくくりにボランティア経験のある学生といっても，現在もなお精力的に活動を続けている学生とそうでない学生がいるという結果が得られた．

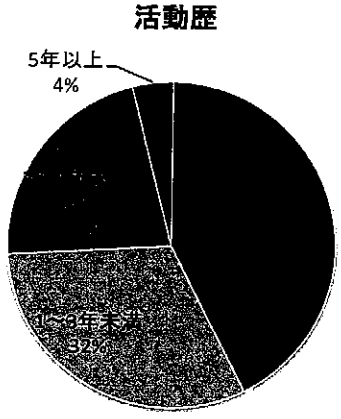

図 6

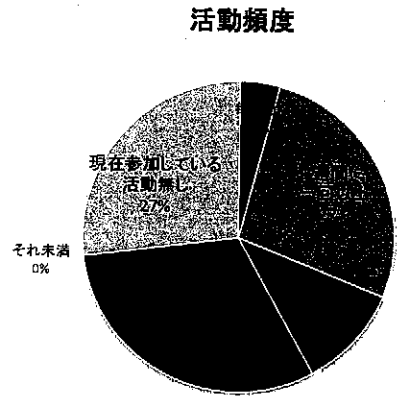

図 7

(4)ボランティア活動参加への障壁となるもの

ボランティア参加経験が「ない」と回答した学生に伊多波・首藤らの先行研究を参考にして，16 項目の質問項目を作成した(伊多波・首藤　2016)．「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の 4 件法で回答を求め，その結果をもとに度数分布表の作成を行った．作成した度数分布票を用いて各項目「あてはまる」に 4 点，「どちらかといえばあてはまる」3 点，「どちらかといえばあてはまらない」に 2 点，「あてはまらない」1 点を与え得点化したものをグラフにした．16 の項目において得点の多い項目ほどボランティ活動への参加経験がない学生にとってボランティア活動参加への障壁だと感じるとした．表その結果，ボランティア活動参加への障壁と感じる項目でもっとも得点が高かったのは「その時間を他の余暇活動に充てたい」(69 点)，次に「時間がない」(66 点)，「アルバイトが忙しい」(59 点)という結果だった．4 番目の項目「きっかけがない」(58 点)と，「興味や関心がない」(57 点)とはさほど得点に差はみられなかった．もっとも得点の低かった項目(ボランティア活動参加への障壁に影響をあまり与えない項目)は「恥ずかしい」(32 点)で次に得点の高かった「ボランティアは自己満足の活動だと思う」(41 点)と得点に開きがみられた．2016 年に行われた大学生のアルバイト就労率の調査では学生のアルバイト率は 71.9%となっている(自宅生 78.4%，下宿生 66.8%)．(全国大学生活協同組合連合会『第 51 回学生生活実態調査の概要報告』)またアルバイトの一週間の就労時間は平均時間 12.5 時間で 20 時間以上も 13.9%を占めている．アルバイト収入の用途は「旅行・レジャー」が 24.3%と最も多い．大学の授業とアルバイトを両立する学生にとって，限られた自由に使える時間とお金を自分の娯楽などに充てたいと考える学生が多いことでボランティアの参加活動の有無が生じると推測する．

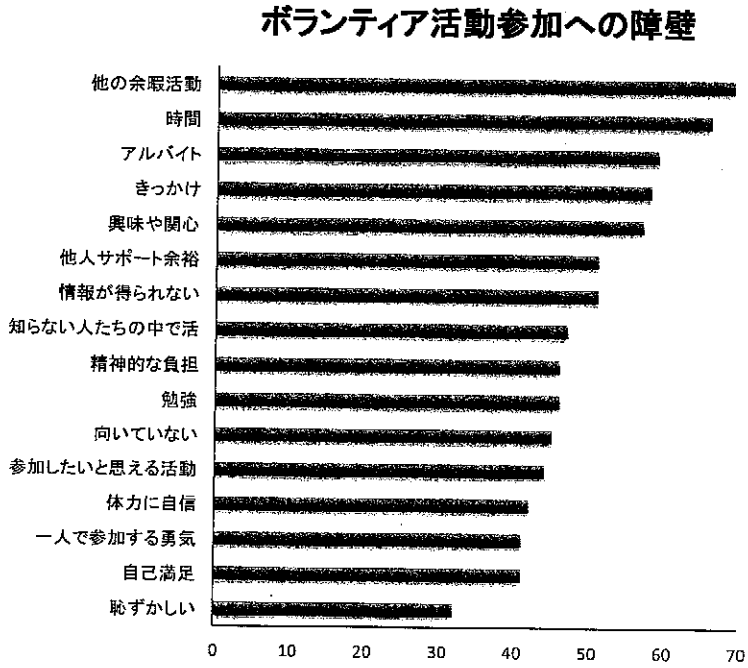

図 8

6-2　変数の合成・尺度化

ボランティア活動の参加動機を測定する要因として，５つの合成変数を作成し尺度化した．尺度の名称は先行研究を参考にしている．

知識の習得尺度は，ボランティア活動をすることが知識の習得になるという考え方４項目に対して，「1.　あてはまる」～「4.　あてはまらない」４段階で得られた回答を逆転・合成して作成した．つまり得点が高くなるほど，知識の習得動機が高くなるということである．表１は知識の習得の信頼性分析の結果である．信頼性分析の結果を表すα係数の値が 0.65 以上だとそれらの質問項目は大体同じものを測定しているとみなし、足し算してよいというふうになる。

	α	項目数
知識の習得	0.738	4

表 1

自尊心の高揚尺度は自尊心を高めるなどの自己強化につながるという考え方がボランティア活動の動機の要因であるという考え方５項目に対して同じく逆転･合成して作成した．これも得点が高くなるほど，自己強化動機が高くなるということである．表２は自尊心の

高揚の信頼性分析の結果である.

	α	項目数
自尊心の高揚	0.766	5

表 2

職業上の成功尺度は自己の将来の職業について何らかの利益をもたらしボランティア活動をすることにつながるという考え方 5 項目を逆転・合成して作成した. 表 3 は職業の信頼性分析の結果である.

	α	項目数
職業	0.758	5

表 3

社会規範尺度は周囲のボランティアへの関わりや,周囲が望むからという考え方がボランティア活動を行う動機の要因であるという考え方 6 項目に対して逆転・合成して作成した. 先行研究では社会規範尺度は「社会的繋がり」と呼ばれているが, 本研究では質問項目の内容から社会規範尺度と名付けている. 表 4 は社会的規範の信頼性分析の結果である.

	α	項目数
社会的規範	0.793	6

表 4

最後の利他主義尺度は他者への関心や利他心がボランティア活動をすることの動機の要因であるという考え方 5 項目を逆転・合成して作成した. 下の表は合成変数の信頼性分析の結果である. 他の合成尺度と比較して信頼性統計量が低かったが, 質問項目の内容, VFI をそのまま項目として参照したことから合成変数の作成を行ってよいと判断した. 表 5 は利他主義の信頼性分析の結果である.

	α	項目数
利他主義	0.494	5

表 5

6-3　箱ひげグラフの作成

最初に，合成尺度とボランティア参加の有無についての影響の大きさを視覚的に読み取れる箱ひげ図を作成した．縦軸は合成尺度の得点を示しており，合成尺度の値はそれぞれ 5~6 点を最小得点とし，最大得点は 20~25 となっている．横軸はボランティア活動の有無で，左が「ある」右が「ない」を示している．箱ひげ図の見方はひげの箱の下端からひげの下端(最小得点)を区間 A，箱の中央の線から箱の下端までを区間 B，箱の上端から箱の中央の線までを区間 C，ひげの上端から箱の上端までを区間 D と呼ぶ．それぞれ区間の長さが短いところにデータが集中している．

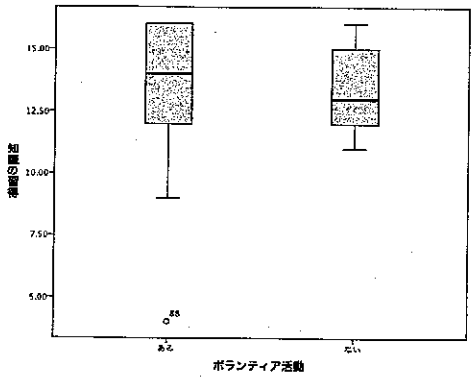

図 10-1

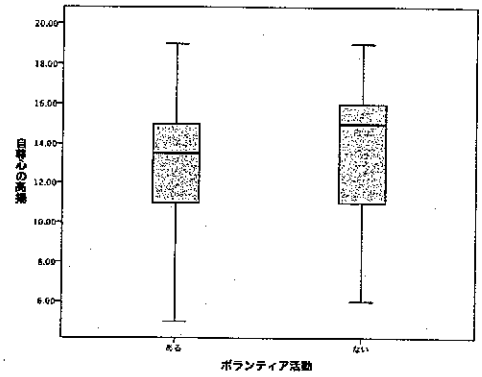

図 10-2

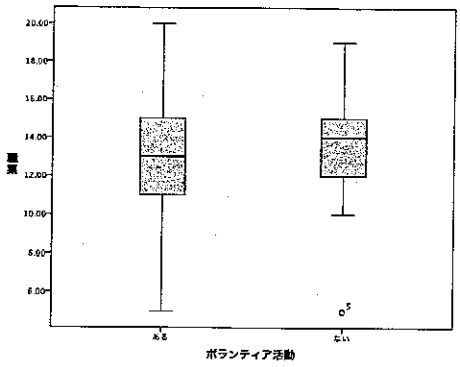

図 10-3

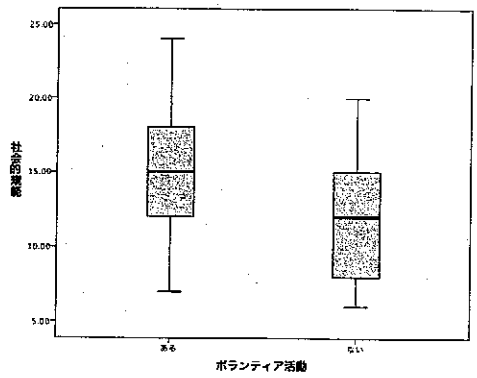

図 10-4

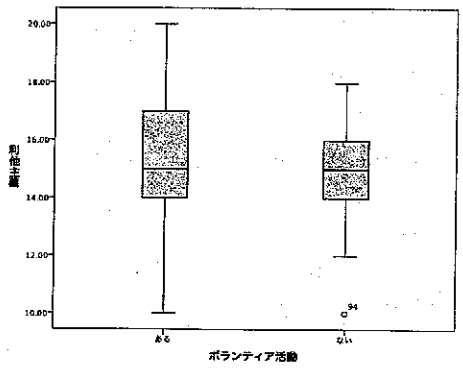

図 10-5

図 10-1 の知識の習得尺度はボランティアの参加の有無に関わらず比較的高い得点が記録されていた．これはボランティアをしたことがない学生の多くがボランティア活動への参加は知識の習得になるというポジティブなイメージを抱いていることが推測される．合成前の質問項目は「自分が取り組んでいることをさらに深めることができる」「ものごとについての新たな考え方が得られる」「直接的な体験を通して様々なことが学べる」「自分が色々な人と付き合っていく方法が学べる」の 4 項目となっていた．ボランティア活動が知識の習得などに役立つという考え方・イメージはボランティア活動の有無にかかわらず多くの学生が持っているといえる．つまり，箱ひげ図からは知識の習得概念とボランティア経験の有無との関連がみられないと推測する．

図 10-2 の箱ひげ図をみると，どちらのデータも得点が区間 C に集中していることがみて分かる．また，得点の開き(外れ値)が 5 つの合成尺度の中で最も大きかったのがこの自尊心の高揚概念であった．合成前の質問項目には「自分の長所を見直すことができる」「自分の大切さを気づかせてくれる」「ボランティア活動への参加は自尊心を高めてくれる」「自分が必要とされていることを実感しにくい」(逆転項目)「自分が好ましい人間であることを感じさせてくれる」となっていた．箱ひげ図に偏りがみられなかったため，自尊心の高揚概念はボランティア参加の有無との関係があまり強くないと推測する．

図 10-3 の箱ひげ図をみると，ボランティアの参加の有無によって考え方，イメージの偏りがないことが分かる．質問項目は「ボランティア経験は履歴書に書くといい印象をあたえる」「自分がなりたい職業に就くきっかけを作ってくれる」「仕事や職業に役立つと思われる新たな出会いの場となる」「自分が選んだ職業で成功することに役立つ」の 5 項目などで，参加の有無にかかわらず「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」などの曖昧な回答が多かったと言える．しかし，ボランティア参加経験者の最少得点は 5 であったのに対し，ボランティア参加未経験者の最少得点は 10 だったことから，職業尺度に「あてはまらない」という項目のイメージを多く持っている人は少ないことが推測される．

図 10-4 の社会的規範概念の質問項目は「家族や友人の中にボランティア活動に参加している人がいない」(逆転項目)「私がボランティア活動に参加することを望んでいる友人がいる」「私の知っている人々は地域での助け合いに関心が高い」「親しい人の中に地域での助け合いをとても大切にしている人がいる」「家族や友人と社会貢献やボランティア活動について話し合う子がある」の 6 項目である．ほかの概念と比べると，箱ひげ図に偏りが確認できたので，ボランティア参加者の有無と社会的規範概念には影響があると推測した．

図 10-5 の利他主義概念の質問項目は「自分より恵まれていない人のことが気になる」「自分が直接関わっている人たちのことが気になる」「困っている人をみると気の毒に思う」「ほかの人を助けることを大切に思っている」「自分のためにならないことはしない」(逆転項目) の 5 つである．利他主義概念においても，ボランティア参加経験の有無に関わらず，データが中央に比較的集中していたので利他主義概念はボランティア経験の有無にそれほど強い影響を与えていないということが読み取れた．ボランティア活動参加の有無に利他主義尺度の動機はあまり関連がないといえる．ボランティアはその活動を通じて得られるものが非常に多くあり，また相手のためだけではなく自分のためにも非常に意義を持つ活動であることが広く浸透していることにより，利他心のみをボランティア活動への動機・

イメージとしてもつ学生がそれほど多くないといえる.

6-4　ロジスティック回帰分析

箱ひげ図から視覚的に読み取ったボランティアの参加経験の有無と合成概念の影響の大きさは果たして合っているのだろうか. これを確認するためにロジスティック回帰分析を行った. ボランティア活動参加の有無にかかわらず欠損値ケースを除いた 92 名の学生に対し,「知識の習得」「自尊心の高揚」「職業」「社会的規範」「利他主義」の 5 項目の中で有意確率の低い概念を算出した結果,「社会的規範」が有意確率 0.006 となった. この変数を用いて,「社会的規範」の概念がボランティア活動参加の有無に影響を与えることを示したものが表 6 である. そのまま図 9 のグラフを作成した.

		B	標準誤差	Exp(B)
合成概念	知識の習得	0.083	0.167	1.087
	自尊心の高揚	−0.135	0.111	0.874
	職業	−0.145	0.121	0.865
	社会的規範	0.215**	0.079	1.24
	利他主義	0.141	0.141	1.152
	定数	−1.174	2.471	0.309
	Nagelkerke R2 乗		0.217	
	注)***:p＜0.001　**:p＜0.01　*:p＜0.05			

表 6

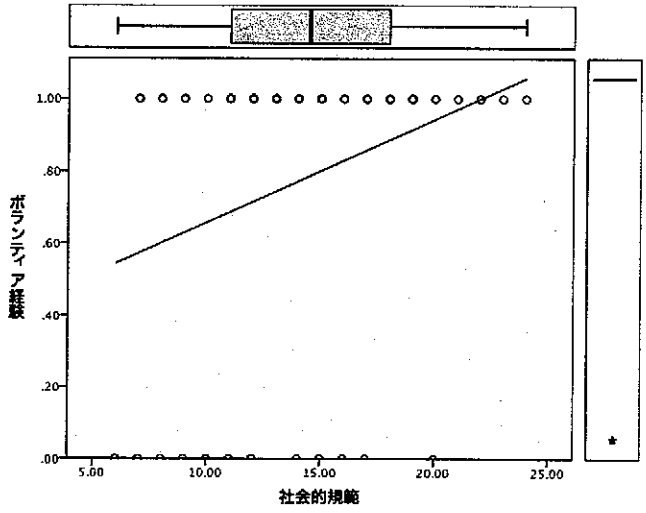

図 9

グラフの縦軸はボランティア参加経験の有無を示しており,「ボランティア活動に参加したことがあるか」という質問項目に「ある」と答えた回答に1,「ない」と答えた回答に0をそれぞれ振り直した.「社会的規範」と合成された6つの質問項目の回答によって最低6～25までの得点が与えられ，社会的規範の得点が20から25の値をとる学生ほどボランティア活動の参加経験があるということがグラフから読み取れる.

ロジスティック回帰分析を行った結果，社会的規範尺度がボランティアの参加動機の要因として判断するのに有意であったことから，ボランティア参加者の多くが同じようにボランティアに関心・興味を持つ人が周囲に多く存在しているといえる．しかし，周囲がボランティアに興味・関心があるから自分もボランティア活動に参加しようという動機になるのか，大学生になってボランティア活動を始めたという学生はサークルなどに入り，必然的に周囲にそのような人が集まっている状況そのものを回答したのかを質問用紙から判断することは困難であり，社会的規範がボランティア活動への参加動機の要因であると容易に判断しかねる結果となった．しかし、社会的規範とボランティアの参加有無は何らかの影響をあたえると考えてよい。

6-5　相関分析

「社会的規範」の合成概念にボランティア活動参加の有無との関連が検出できたため，相関分析を用いてさらに詳しく分析した．今回の相関分析では全ての変数が順序尺度，ボランティア参加の有無が比例尺度だったため，順序尺度と量的変数で使われるスピアマンの順位相関係数を使用している．そして全ての変数を原因となる独立変数,「ボランティア活動有無」を結果となる従属変数にいれた．つまり，ある変数に「ボランティア活動有無」との相関が見られた場合，程度にもよるがその変数をボランティア活動参加の有無になにかしらの影響を与えるもの＝動機であると考える．（表7）

社会規範	ボランティア経験の有無との相関
家族友人参加してない	.237*
友人参加望んでいる	.255*
知人助け合いに関心高い	0.025
知人助け合いを大切	0.108
家族友人と社会貢献話し合う	.398**
知人にとって大切な活動	.216*

注)***:p＜0.001　**:p＜0.01　*:p＜0.05

表7

相関分析を行った結果,「社会的規範」合成前の変数,「家族友人参加していない」「友人参加望んでいる」「家族友人と社会貢献話し合う」「知人にとって大切な活動」の４つに「ボランティア経験有無」との弱い正の相関があると分かった.「家族友人参加していない」の質問項目は「家族や友人の中にボランティア活動に参加している人がいない」という逆転

項目になっており，参加している人がいないほどボランティアの参加活動経験がない人に相関があると言い換えることができる．続いて，変数「友人参加望んでいる」の質問項目は「私がボランティア活動に参加することを望んでいる友人がいる」となっている．正の相関が出ているので「あてはまると」答えた人ほどボランティア活動の参加経験があるといえる．変数「家族友人と社会貢献話し合う」は弱い相関ではあるがその程度はもっとも大きかった($p<.001$)．この質問項目は「家族や友人と社会貢献やボランティア活動について話し合うことがある」となっている．弱い正の相関がみられることからあてはまると感じる人にボランティア活動の参加経験者が多くいることが分かる．最後の変数「知人にとって大切な活動」の質問項目は「ボランティア活動は自分がよく知っている人にとって重要な活動になっている」というもので，こちらも正の相関が出ていることからあてはまると感じる人ほどボランティア参加経験があるといえるだろう．

7章　考察

2002年に坂野・矢嶋・中嶋はVFI（Volunteer Functions Inventory）モデルの日本での交差妥当性と有用性を検討した.当時のボランティア活動に関する動機の特徴として「知識の習得」「利他主義」「自尊心の高揚」が高いことが分かった．この時の社会背景として考察されているのが採用の際にボランティア経験を問う企業が増え始め，日本におけるボランティアに対する社会的な関心の高まりが学生のボランティア参加を促進する要因となっていることが考えられるという．2002年とは東日本大震災が起こる以前のことである．今回東日本発生から7年が経とうとしている．同志社大学生に対して行った同様のモデルを用いた研究では，「社会的規範」がボランティアの有無に大きく影響を与えているという結果になった．社会的規範とは社会や集団の中で期待されている態度や行動のことを指し，社会学において，人間社会集団におけるルール・慣習の一つである．

今回の結果から私たちを取り巻く社会状況は東日本大震災以降どのように変化し，また，それが私たちの意識にどのような変化を与えてきたか，そして今回の調査結果とどのように結びついているのかを考察する．

社会的規範概念とボランティア活動参加に影響があったことから、多くの大学生のボランティア参加動機に“周りにボランティアをしている人がいるから” というようなことがいえる。東日本大震災が起こった際、私たちは被災された方々が現地で直接ボランティアを行う人たちに大変感謝していた様子をメディアなどで何度も放送されるのをみてきた。〝愛は地球を救う〟というフレーズでおなじみの24時間テレビでは毎年チャリティー企画が行われ、集まったお金は慈善活動に使用されるというのは誰もが知っている。東日本大震災という未曽有の大災害が起きたとき、現在の同志社大学生は当時小学校の高学年から中学校3年生くらいであり、メディアの影響を受けやすい多感な時期であったと考えられる。学生は東日本大震災を機に再び社会の関心のひとつとなる勢いをみせたボランティア活動に、多くの大人が参加する姿を見てきたことにより、ボランティア活動に参加することが実現すべき社会のあり方であるという社会規範としての意識が芽生え、今回のような結果になったと考える。そのほかの考察として挙げられるのは、学生がボランティア活動に参加したことがあるか否かは〝周りにボランティアをしている人がいるから〟という

周囲とのつながりの強さが関わっているというものである。しかしこちらの意味では東日本大震災が私たちの意識に与えた可能性のある影響については十分な考察をおこなうことができなかった。そして、今回の調査対象者に筆者も所属しているボランティアサークルに入っている学生の割合が多かったため、大学でボランティアサークルなどの集団に入ってボランティア活動を行っている学生の回答が偏れば、この社会規範の尺度はボランティア活動の有無に影響を与える動機ではなく、周囲にボランティア活動に熱心な人がいるという必然的な状態になってしまうことが考えられる。

8章　結論

今回の調査で明らかにしたかったこと(リサーチクエスチョン)は，同志社大学生のボランティア参加動機はいったいなんなのかということである．このリサーチクエスチョンが生まれた背景には同志社大学に最近ボランティア支援室が開設されたこと，筆者自らのボランティアサークルでのボランティア活動を通して，ボランティアをする人とそうでない人たちそれぞれに影響を与えている要因=動機を明らかにしたいと思ったからである．

ボランティアは世界規模でその広がりを見せつつあるが，最近の日本の若者は，日本の40～60歳代の方や諸外国の同世代と比較すると社会貢献をしたいと感じボランティアに関心があるという割合が少なくなってきているという現状があった．先行研究では多くの研究者がボランティアの動機を特定する為の研究をしていたが，ボランティア活動参加について複数の動機がそれぞれに相関を持つと考える複数動機アプローチが主流になっている．今回はその中でも既存のボランティア参加動機のモデルであるVFIの邦訳版を用いてそのリサーチクエスチョンを明らかにするべく，質問紙を作成した．回収した変数を合成し，新たな５つの概念を作った．そして従属変数に「ボランティア参加の有無」をダミー変数にしたものを,独立変数に全ての合成変数をいれてロジスティック回帰分析を行った．その結果，ボランティア活動の参加の有無に影響を与える尺度は「社会的規範」($p<.001$)であることが判明した．この結果の背景には、東日本大震災の発生により勢いを見せたボランティア活動が震災発生当時まだすこし幼かった私たちにボランティア活動の参加は社会のあるべき姿という規範意識を与えたことにつながったと考えた。しかし社会規範尺度がボランティア活動の参加の有無の要因となっているのではなく、その逆のボランティア活動の参加の有無が周囲と自己のボランティア活動に対する行動の要因であるとも考えられ、質問項目の文脈などがあいまいだったために十分な分析が行うことができていない可能性も含んでいた。

9章　おわりに

このこととは別に今回調査・分析を行う上で反省すべき点が二点あった．一点目は質問紙を作成する時期が遅れてしまい，分析に必要な十分なサンプル数の回収ができなかったことである．サンプル数が少なかったために，VFIというボランティア参加動機の要因となる有用性の実証されたモデルを使用しているのにも関わらず，分析の結果信頼性の高い尺度を一つしか検出することができなかったことだ．二点目は，VFIの有用性を信頼しあ

まり手を加えずに調査用紙の質問項目を作成したことで，ボランティア活動参加経験者しか回答することのできない項目が5つ存在した．今回その5項目は参加の有無に関わらない全員の回答を得ることができなかったため,結果の分析には利用できなかった点である．それにより,「感情的安寧」を示す合成尺度の作成を断然せざる方向となった．

最後になったが、今回分析を行うにあたり調査にご協力いただいた国際居住研究会、社会学部の学生様、ならびにすべての方たちにお礼を申し上げたい。

そしてなにより指導教員である立木茂雄先生、TAの川見さんには大変お世話になりました。心からの感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

参考文献

荒井俊行・野嶋栄一郎，2006，「大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響」『日本教育工学会論文誌』，40(2)，85-94

荒川裕美子・保住芳美・吉田浩子，2006,「学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連」,『川崎医療福祉学会誌』，16(1)，133-139

伊多波美奈・首藤敏元，2016,「大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果，自己効力感，及び協調性との関連」『埼玉大学紀要教育学部』，65(2)：35-46

妹尾香織，2008,「若者におけるボランティア活動とその経済効果」,『花園大学社会福祉学部研究紀要』，16，35-42

大阪ボランティア協会編，1981,『ボランティア―参加する福祉」，ミネルヴァ書房，p.24

岡鼻千尋 ，2013,「ボランティア活動経験が大学生のボランティアイメージに及ぼす影響」『心理科学』，第34巻第2号

小澤亘，2016,「ボランティア文化研究の挑戦―日・韓・加3カ国ボランティア意識調査を振り返って―」,『立命館産業社会論集』，第52巻第1号

小澤亘，2001,『ボランティアの文化社会学』，世界思想社

狩野仁哉 ，2014,「学生ボランティアの参加動機に関する研究」,『Kwansei Gakuin policy studies reviw』，(20),13-16

興梠寛，2003,『希望への力』，光生館，p.61

倉掛比呂美・大谷直史，2004,「大学生にとってのボランティア活動の意味」,『鳥取大学教育地域科学部紀要』，5(2)，209-227

小林久高・猿渡壮，2014,「幽霊と参加」,『社会科学評論』，110，1-19

坂野純子・矢島裕樹・中嶋和夫，2002,「大学生におけるVolunteer Function Inventoryの交差妥当性の検討」,『岡山県立大学保健福祉学部紀要』，第9巻1号，24-31

猿渡壮，2015,「ボランティア活動への参加をもたらすもの」,『社会科学評論』，第114号，35-51

田尾雅夫，2001,『ボランティアを支える思想』，アルヒーフ，p.20-21

高木修・玉木和歌子，1996「阪神・淡路大震災におけるボランティア：災害ボランティア

の活動とその経験の影響」,『関西大学社会学部紀要』, 28(1), 1-62
森法房, 2002,「山口県立大学における学生のボランティア活動に関する調査報告」『山口県立大学社会福祉学部紀要』, 8, 39-53
森保文・森賢三・犬塚裕雅・前田恭伸・淺野敏久・杉浦正吾 , 2010,「参加したいボランティア活動の種類と動機の関係」,『The Nonprofit Review』, Vol.10, No.1, 1-11

平岡公一, 1986,「ボランティアの活動状況と意識構造――都内 3 地区での調査結果からの検討,『明治学院論叢 社会学・社会福祉学研究』, 394・395, 29-61
豊島慎一郎,1998,「社会参加にみる階層分化――社会階層と社会的活動」,片瀬一男編『1995 年 SSM 調査 シリーズ 7 政治意識の現在』1995 年 SSM 調査研究会, 151-178

[1] IAVE はボランティアと世界各地の全てのセクターの指導者が, 効果的で人々と国家間の連帯の象徴として, 全ての人がアクセス可能なボランティア活動を促進, 支援するため一致団結できるように取り組んでいる唯一の国際組織である